

総括

ロバート・キャンベル

キャンベルと申します。お疲れ様です。二日間たっぷり、大変充実した16人による発表、そして最後に岡田先生の講演をいただき、これはエコかどうか分かりませんが、大変満腹感を得ることができた二日間だったように思います。

今日、岡田先生のお話の最初の方に、少し回想といえますか、思い出を語っていただいたわけですね。カリフォルニア大学のパークレー校にいらした頃の恩師との語らい、その時に感じたことをおっしゃったんですけど、私は実はその同じ時空の中におりまして、私がパークレー校に入って一年、十九歳の時に、一年生と二年生の間の夏、集中講義を受けまして、そのとき初めて日本語を学習しました。

その時に、ここにいらっしゃいます岡田先生が私の日本語の先生でした。集中講義でしたので、何人か先生がおられたのですけれども、その時一番、多分大学院のその中で様々なことがあって、ご自分の研究も白熱なさっている時代、そのことを差し置いて、あるいは抛って一夏、大変暑い夏に、私たちに日本語、初級日本語を徹底的にたたき込んでくれたという、ちょっとこの辺に後遺症がまだ残っているような記憶があります。そのことも、今日伺っていて懐かしく思い出すと共に、その翌年、私は二十歳だったと思うのですけれども、キャンパスですれ違ったときに立ち話をする機会があって、僕はこれからどうしようかな、何か経済とかそういう方向に行くかな、文学にしようかなと考えていて、今文学を専攻しようと、丁度日本で言う進振りの相談のような話をしたところ、おまえは何で文学の勉強をするのか、文学ってあなたにとってどうして必要なのか、文学を通して何をやりたいのかということ、本当にきつい一撃を食らわされたことを、先生のご記憶には多分まったくくないと思うのですが、私にと

っては生涯消しさることができない、重要な事件だったわけです。

つまり、文学を、文学を面白い、好きだ、日本語をやって何となく適性がありそうだ、というかなんとかやれそうだ、それだけの思いでは文学研究と言うことでは、だめだよということを、非常にきびしくその時伺ったことを覚えております。ありがとうございます。

すみません、今日の私のつとめは、全体の、二日間を総括することであって、振り返ったり回想したりすることではなかったのかも知れませんが、そのように、メンタルエコロジーではないのかもしれませんが、いろんなことがやはり循環する、あるいは往還するということを、今日の岡田先生のお話を始め、様々に今回感じました。

私たちは、この集会を企画する委員会は年に二度集まって、反省をしつつ、これからどういうふうに、次の、あるいは次の次の会でどういうことを取り上げていくのかということを考えています。そうしますと、一番盛り上げるのは次の年にどういうテーマで呼びかけをするのかという問題があります。そこからちょっとした面白い議論が生まれたりするわけですが、この集会が日本で学び、あるいは仕事をする外国人の日本文学研究者たちの研究を支援する、あるいは海外から研究者、外国人または日本人、日本国籍の方々を呼んで新しい手法、新しい発想をですね、それを共に語り合おうということを目的にしているので、網の目をどれくらい大きくとって、様々な地域の中で日本というもの、日本文学の研究が異なるスピード、異なる目標に向かって為されている中で、一つのテーマでどのように網を投げていくかということは、考えてみると大変なことなんです。

この四五年、細かく言いますと、私は平成十五年ごろから気づいていることですけれども、非常に網の目を細かくしていく、つまり具体的に絞ったテーマを投げかけることによって、非常に鋭いもの、といいますか、テーマに応じてくださる若い研究者たちが、一つの段階として現われ、ここ数年ますます増え

ています。

それなので、今回は世界文学の中の日本文学という大風呂敷を広げて、そこに物語ということを引きかけて、いろんな入り口から入ってこられるということを試みました。たとえば物語に見る唐土の意識でありますとか、中国の題材を取り上げた日本の能が、今度は現代の中国語に翻訳される時、どういう差異化が生まれ、あるいは抹消されるかとか、あるいは落下という一つの動作、出来事の中に、ジャンルとメディアを超えて、相互参照がなされるわけですが、今日武井先生のお話にもありましたように、それは実は歌舞伎を見て、そういうモンタージュしていく発想というものが基層にあって、それこそ往還しているということです。

今日の最初の朝のセッションに、最初の三方が、モンタージュという言葉、発表の中に、あるいは質疑応答の中に使っていました。横断的に考えるということが、具体的にどういうことなのかということ、岡田先生の今のご講演もそうでしたけれど、日本文学という具体性、固有性を超えたところで考えさせられることが非常に多かったように私は思いましたけれど、皆さんいかがだったでしょうか。

そういうことをまとめる、総括するという立場から完全に離れてですね、私はここでなければ絶対に聞くことができない、知ることができないこと、たとえばベトナムの漢文小説、あるいは説話の中の、鬼退治の話ですとか、源氏物語がスウェーデン語として翻訳されるときに、どのような妥協、どのような戦法によってそれがなされて成りたっていくかという話を聞くことができ、大変幸福な気持ちになっています。

来年は、もう一度少し絞り込んで、といいますか、もう少し具体的なテーマをうち出そうということを、今回の委員会で話しをしております。

今までは、平日、戸越という別の場所で、かなり違う要領で行っていたものが、今回どうなるのかと心配していましたが、こんなにたくさんの方々が最後まで、粘り強く最後までいてくださったことが、大変心強いです。特に、

研究職にはいらっしやらなくて、ずっと前から、戸越の時代からずっと何度も足を運んでくださった方々が、ちらほらと、もうお帰りになった方もいらっしやいますけれども、中におそらく遠い所から、本当に東京の反対側から、わざわざ来ていただいて、つなげていらしてくださった方に対して、本当に感謝の意を表したいと思います。

すみません、ちょっと話がそれてしまいましたけれども、来年は、「語られる人称・なぞられる視点」という、人称、これは一人称であったり二人称であったり、つまり人称の問題、それから視点の問題、これはもちろん今回のテーマであった物語、あるいは語りということにもつながるものにもなるかと思いますが、そのようなテーマで発表を募集していく所存です。

十一月の中旬あたりになるかも知れませんが、追ってお知らせしたいと思います。例年通り三十三回目の集會に是非またおいでいただければという風に思います。

最後になりましたが、岡田先生に、今日わざわざ時差を冒して、学期の真ん中にもかかわらず来ていただいて、二日間ぐらい発表をして、また帰すというむごいことを、資料館でしていると思うのですが、岡田先生がですね、こんな短い間に、私たちのために今日お話をしてくださって、またすぐにおかえりになるということで、お気の毒といたしますか、でもよかったねと申しますか、本当にありがとうございます。

発表者全員に、最後にもう一度拍手をして今日はお開きにしましょう。どうもありがとうございました。